米国における心理教育を取り入れた授業に参加して

東京大学大学院教育学研究科研究生　金　子　真由美

この度，ニューヨーク市立の公立高校にて行われている，心理教育を題材とした表現教育を取り入れた英語(国語）の選択授業に参加・見学する機会に恵まれたので，ご報告致します。

学校の概要

ニューヨークのマンハッタン内ミッドタウンに位置する49丁目に，The High School of Graphic Communication Artという公立専門学校がある。４年制の高校なので，９年生から12年生という，14歳から17歳までの生徒がGraphic Communication，Printing Art，Photographを学んでいる。

朝８時に授業が開始され，１コマ（１校時間）45分間で，授業と授業の間の休み時間が３分間。お昼休みは特になく，生徒は空いた時間に適当にスナックや昼食をとる。１日最大９校時の授業がとれる。

この学校では全学年を通して英語（国語）が必修及び選択科目に入っており，５人の先生が分担している。１年を通して週５日，毎日１時間ずつ授業がある。全学年の生徒が一斉に教師を選択する方式で，国語の選択授業のクラスは全４学年から誰でも選択できる。

心理教育・表現教育を取り入れた授業

国語の教科担当の一人であるMs. Ferrandiのクラスでは，playと呼ばれる表現方式を用いたクラスをここ数年続けて開催している。このクラスを選択した生徒は，通常の教室内で行われるような読み・書き以外に，学校講堂の舞台を使用して自ら身体表現をする方法（play）を用いたクラスに参加することになる。Ms. Ferrandiは昨年まで数回にわたり，青年期の妊娠や麻薬をテーマにこのplayを用いて授業を行ってきた。

自分の体験エッセイを書き初めてからplayまで，約２ヶ月で１クールが完結する。基本的にはact(実演による表現）の授業時間分までが出席日数と評価に含まれる。しかし，actが苦手だから，とその分の授業に参加しない場合は欠席扱いになり単位の為の評価（成績）に関係するが，本人がそれを了承すれば書くだけでactをしない選択方法も可能である。

学外専門家集団との共同授業

授業形態としてもう一つ特色的な事として，教科担当の先生自身に加えてManhattan PlayhouseというNPO団体に教科担当がクラスを依託し，授業を共同運営していることである。アメリカ合衆国の中でもブロードウェイを中心としたショウビジネスのカンパニーが集中するマンハッタンにある公立高校らしいことであるが，授業の企画とマネジメントなど教科教育的なことは教科担当の教師が行い，playに関する舞台周りのこと（脚本，演技指導，設営を含む技術面，衣装など）は専門家に任せ，授業効果を上げようと意図しているのである。

この，Manhattan PlayhouseというNPO団体と高校のつながりはこのクラスの他にも，毎週火曜日と金曜日の放課後の課外活動（after school activity）や季節のお祭り（ハロウィーンやクリスマス）などがある。（アメリカの学校の多くは学校主催のクラブ活動がなく，その代わりに地域の団体に依託したスポーツや文化活動が行われている。）

今回私が参加させていただいたクラスについて

私は，2001年11月から12月までの約２ヶ月間，このMs. Ferrandiのクラスの授業に参加させていただいた。今回のplayで取り上げられていたのは青年の『うつ状態』（Depression）だった。クラスは（火）（木）の週２回，12時56分から１時39分までである。

クラスを選択した生徒は15人，教科担当のMs.Ferrandiと，Manhattan Playhouseからはインストラクターの Ms.Worlandが中心となり，カンパニーの責任者のMs. Walker，テクニカルディレクターのMr. Usuiの合わせて４人が共同運営するような形で行われていた。授業の初めの部分で生徒に自分の『うつ状態』体験を文章で書かせ，それをカンパニーの人が脚本化し，クラス全体で１本のscriptを作成，生徒自身にactさせる。また，今回は特別に授業の仕上げの表現発表(performance)場面に製薬会社の企業から精神科医と心理学者を招き，表現発表終了後に生徒の個人的体験や精神面での質疑応答の場が設けられた。(これはManhattan Playhouse のNPO団体としてのグラントにも関係するため，学校教育側と

NPO団体側双方にとって有益なこととなる。)

学びのねらいと表現教育という方法を用いることについて

教科担当であるMs.Ferrandiに，幾つか質問をしたので，以下引用する。

・なぜ国語の授業でplay（表現）という方法を用いているのですか？

「文学は書くだけではなく，見て，話して，行動して学んでいくものだからです。」

・なぜ国語の授業で『うつ状態』を取り上げ，扱うのですか？

「理解のためです。『うつ状態』というものを生徒は正確には知らない。彼らが知らないことを教えるのが，大人の役割だからです」。

・この授業形態は，アメリカではポピュラーなのでしょうか？それともユニークなのでしょうか？

「他ではあまりないことだと思うけど，私にとっては特別ではありません。私は毎回このような授業を取り入れているし，毎年行っています。Manhattan Playhouseの人達とだけではなく，他にもヒスパニックの人たちと違うクラスを行っています。この学校では，卒業する生徒は25%だけで，多くの生徒達は仕事を見つけて出ていきます。興味をもたせ，惹きつける授業方法は必要です。」

まとめに変えて

以上，ニューヨークにある公立専門学校にて行われている，心理教育を題材とした国語の選択授業の試みについて報告した。

授業に快く参加させてくださった，H S Graphic Communication of Art School 国語教科担当のMs.Ferrandiと生徒の皆様，Manhattan Playhouse のスタッフの皆様に，この場を借りて厚く御礼を申し上げたい。特に，教科担当の先生であるMs. Ferrandiはいつも生徒達に「チェイス」され，「(表現教育や心理教育の意義やテーマは私にとって）とても関心がある話題なのに，生徒はゆっくり話させてくれない！」と，傍らで単位取得の為の評価が満たなくなりそうな生徒の指導をしながらのインタヴューだった。本当にありがとうございました。

もともとセキュリティーの厳しいマンハッタン地区の公立高校であることに加えて，おりしもツウィンタワービルのテロ事件直後ということもあり，この学校の入り口玄関付近に備え付けられた生徒の持ち物検査用機材（空港に設置されているエックス線検査の機械）の側には多数のスクールポリスが常駐していた。また，地域と学校の特色から，アフリカンアメリカンやヒスパニック，イタリアン，アジアンの移民の低所得層の生徒が多く，アメリカの公立高校としては特殊な高校であったかもしれない。が，学校に出てくる生徒は授業やクラスの活動に熱心で，明るく日常のクラスを営み，感謝祭に始まるホリデイイベントを楽しみに計画しながらの学校生活を送っていた。

今回私は異文化での教育現場に直接触れることができ，とてもよい経験をさせて頂いたと思う。